新　刊　紹　介

編集委員会

□『野草譜』. 奥田實（著）, A4 判 . 272 頁 . 2021 年 4 月 26 日 . 平凡社 . 6,800 円＋税

本書のまえがきで著者は次のように記している。“本書は、わが家の庭先で世代をつなぐ身近な野草たちの生命の物語である。写真の記録媒体がフィルムからデジタルデータにかわり、情報量も格段に増えた。私の意図によっても、より自在な表現が可能になった。植物の成長や季節によって変幻する姿を 1 枚の画面に構成することにより、ライフサイクルである時間軸と生命の形を同時に見比べられるようになった。記録を積み重ねることで、新たな命を吹き込むことができるようになったのである。”

取りあげるのは通常よく目にする野草 119 種（早春 15 種、春から初夏 37 種、盛夏 42 種、秋から初冬 25 種）で、何れも北海道で見られるものである。

各野草の成長過程に応じた全体と各部分を、背景紙を使用する切り抜き画像の手法を用い、多くの画像を A4 版の紙面全体に配置したコラージュとなっている。このため芽出し・展葉・開花・結実に至る高精細な各画像を辿ることで生活史を学ぶことができる。これと同じコンセプトで著者は「生命樹」（2010）、「野菜美」（2014）を出版している。

著者は北海道東川町に基盤を置き活動しているが、これまでに写真集「大雪山のお花畑」（1987）、「北海道花の大地」（1989）、「大雪山」（1991）などを出版している。

本稿の筆者にとって、野外における植物観察の足りなかったところを補ってくれる格好の一書であり理解を深めてくれる一書でもある。また北海道の長い冬の期間、野外に植物観察に行けないときに、本書を紐解くことで野草観察の疑似体験を楽しんでいる。

□『MAKINO』. 高知新聞社（編）, 新書判 . 224 頁 . 2022 年 7 月 1 日 . 北隆館 . 900 円＋税

本書は“牧野日本植物図鑑”の版元である北隆館の出版本であるので、興味を覚えて手にした本である。編者は牧野の出身地にある高知新聞社であり、著者は同社の竹内一氏である。

筆者は牧野が訪れ、過ごした全国各地の足跡を旅して得た体感をもって牧野の生涯

をたどったとし、“本書に新事実はなく「牧野富太郎自叙伝」を中軸として、これまで書かれてきた伝記や評伝、そしてフィクションを含む小説までも読み解き引用しながら書かれた、高知新聞の連載記事をまとめた単行本の新装版である”と、あとがきに記している。

本書を書くために訪れた所は、利尻、屋久島、東京、神戸、仙台、晩年の東京、佐川であり、この順に章を立てて筆を進め、牧野の生まれ故郷の高知県佐川町で終わっている。

まず利尻をとりあげてみる。牧野が1906年に日本山学会の機関紙「山岳1-2号」に寄稿した登山記録「利尻山と其植物」を随時引用しながら新聞記者らしく、現地を訪れて牧野の足跡をたどりながらルポルタージュ風に話を展開して行く。他の訪れたところについても、牧野に関する資料を読み込んでいるだけあって、挿話も豊富で読み進めやすい一書となっている。

牧野が北海道を訪れたのは本書で取り上げている明治36年の利尻島と昭和2年の北大で開催された「マキシモヴィッチ氏生誕百年記念会」くらいであろう。どういうわけか北海道とは縁が薄い植物学者であった。

最近、牧野富太郎を題材にした小説「ボタニカ」朝井まかて著(2022年1月 祥伝社)が大変面白かったのでご紹介しておく。

□『西洋本草書の世界』. 大槻真一郎（著）, 澤本亙(編)A5判. 263頁. 2021年7月30日. 八坂書房 . 3,500円＋税

本書は科学史家・薬学史家として知られ

る大槻真一郎の遺稿のなかから植物関連の論考を澤本亙が整理したもので、著者が40代から80代の長い期間にかけて書かれたものである。

目次は次の通り

口絵（ディオスコリデス「ウィーン写本」より32葉）

第1章 ディオスコリデスとギリシア本草の歴史

第2章 テオフラストス『植物誌』について

第3章 ディオスコリデス『薬物誌』とウィーン写本について

第4章 プリニウスと植物 ー『博物誌』植物篇・植物薬剤篇をめぐって

第5章 ルネサンスと本草学 ー H・ボックの本草書を読む

第1章から第4章は、古典文献学的研究の成果をまとめた論文と、各訳書の「あとがき」「解説」として書かれたものから成っている。第5章は、代替療法の機関紙に連載された記事がもととなっている。

テオフラストス（BC372頃～288頃）、プリニウス（AD23～79）、ディオスコリデス（AD40～90）、H・ボック（AD1498～1554）を取り上げ、古代ギリシア・古代ローマ・ルネサンス期へと西欧に古来より伝わる植物学の起源となる著名な本を取り上げて、西欧の植物療法から始まる植物学の歴史が概観できる。

アリストテレスの後継とされるテオフラ

ストスには客観性のある記述の『植物誌』が伝わっているが、近代植物学的分類も行っていて“植物学の祖”とされている。第2章は著者が月川氏と共訳した「テオフラストス植物誌」（1988. 八坂書房）の解説部分からの転載である。

プリニウスは膨大な『博物誌』を残しているが、当時の社会批判的なものが主とされるが、植物に関してはテオフラストスからのものが多く、同時代のディオスコリデスには引用・言及がない。第4章は「プリニウス博物誌」（1994. 八坂書房）の解説からの転載である。

ディオスコリデスの『薬物誌』は、その原本は失われているが、多くの写本が残されている。写本にはアルファベット順に配列されているものと、そうでないものとの系統があり、有名なウィーン写本はアルファベット系である。この写本は現代でも同定可能なほど特徴をとらえた植物図を伴っていることでも知られる。これらの写本は西欧において古代から近世に至るまで大きな影響を及ぼしてきたことで、日本における李時珍の「本草綱目」に例えられることもあるが、ディオスコリデスのほうがはるかに長い期間に亘っている。第1章と第3章は「ディオスコリデス研究」（1983. エンタプライズ）と、共著「ディオスコリデス薬物史」（1983. エンタプライズ）からの転載である。

ルネサンス期の植物学や植物図譜の歴史に関しては、ボックではなく同時代のブルンフェルスやフックスを取り上げるのが順当と思われるが、著者の大槻氏は薬学にも造詣が深いが、薬剤の効能について特徴表示説と類似療法という著者晩年に関心を寄せていたテーマでもあったものがボックの本草書中に見出される。これが第5章で取り上げることとしたと編者のあとがきに記している。本文中に古代ローマ期のディオスコリデスの写本の植物図とルネサンス期のボックの書中で同じ植物図を種類ごとに対比して載せているのは興味深い。第5章は著者がアロマ環境協会の会報誌に連載したものである。

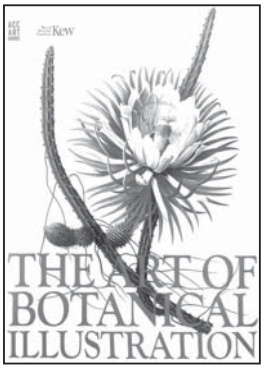
□『野に咲く花の生態図鑑 春夏篇』,『同 秋冬篇』. 多田多恵子（著）, 文庫判 . 208, 203 頁 . 2021 年 5 月 10 日 , 2021 年 12 月 13 日 . ちくま文庫 . 900 円＋税

NHK ラジオの「子ども科学電話相談室」でお馴染みの著者が著わした野草エッセイ集であり、身近に見られる野草を主に春秋編 19 種、秋冬編 18 種を取り上げている。

各植物を 4 ページの解説と 2 ページの写真で構成し、その生態を平易な文章とポイントを押さえた写真で要領よく特徴を理解する工夫がなされている。また著者がその植物をよく観察した結果が感性豊かに表現されている。

筆者が知っている積りの植物でも、生態学的な面から案外知らなかったことにもさりげなく触れていて参考になった。

□『The Art of Botanical Illustration』. Wilfrid Blunt and William T. Stearn（著）21×27cm. 360 頁 . 2021. ACC Art Books. ＄45



西欧の古代から近代にいたる植物図譜の歴史の解説書として、定評のあるウィルフリッド・ブラントの「植物図譜の歴史」（村謙一訳　八坂書房刊　1986）があるが、本書はこれの改訂新版と言えるものである。

1986 年刊においてブラントに協力していたスターンが本書では共著者となり、図版の追加やカラー化、特に第 23 章（二十世紀）と第 24 章（エピローグ — 植物画五百年の足跡）は大幅に改訂し、新しい図版・情報を加えている。

第 1 章から第 22 章は旧書と同じ文章であるが、図版がより精細となり追加され、カラーの再現も良くなっている。本書の訳書はまだ出ていないが、旧版を所有されている場合、本書と見比べて見ることも一興であろう。

（吉中）